彗星の話

豊島与志雄

一

むかし、ギリシャの片田舎(かたいなか)に、ケメトスという人がいました。小さい時に両親(ふたおや)を失って、お祖父(じい)さんの手で育てられていましたが、非常な乱暴者で、近所の子供達と喧嘩(けんか)をしたり、他人の果樹園に忍び込んで、林檎(りんご)や無花果(いちじく)の実を盗んだり、野山を駆け廻ったりして、その日その日を遊び暮らしていました。

お祖父さんは非常に心配して、いろいろ言い聞かせましたけれど、ケメトスは耳にも入れませんでした。

空に星がいっぱい輝いてるある晩、お祖父さんが庭

を歩いていますと、上から石ころみたいなものが飛んできて、すぐ前に落ちました。拾い上げてみると、それは大きな林檎でした。お祖父さんはびっくりして、林檎が飛んできた方を仰ぎ見ました。すると、そこの屋根の上にケメトスが、星の光で林檎をかじりながら、にこにこ笑っていました。——そんなことが何度もありました。

「ケメトスの行末が気になる」とお祖父さんは眉をひそめました。

お祖父さんは考えたすえ、ある時ケメトスを側に呼んで、今まで隠していたことを話してきかせました。

「ケメトスや、わしの言うことをよく聞くがよい。……お前が生まれる時に、わしは庭に出ていた。空一面に星が輝いてる晩だった。お前が無事に生まれるようにと心で祈りながら、ぼんやり空を見上げていた。すると、一際（ひときわ）強く光ってる星がわしの眼にとまった。しばらくすると、その星がすーっと流れて、瞬（また）たくまに消え失せてしまった。ちょうどその時に、家の中から、お前の産声（うぶごえ）が聞こえてきたのだ。

わしには、そのことがいつまでもわすれられない。星が流れるのは、ことに一際輝いてる星が流れるのは、悪い知らせなのだ。お前が生まれる時に星が流れたの

は、お前の運命がよくないという知らせだ。
　だが、運命というものは、ある点まで自分の手でこしらえ直すことが出来る。わしのように老人になると、そのことがはっきりわかるのだ。自分の運命を自分の手でよくなしてゆくことが、人間の一番大切な仕事なのだ。［＃「なのだ。」は底本では「なのだ」］
　よいか、ケメトスや、お前はあまりよくない運命を荷（にな）ってるようだから、それをよくなそうと努めなければいけない。さもないと、お前の終わりはきっと悪い。わかったか、ケメトスや」
　ケメトスは何とも答えないで、ただうなずいてみせ

ました。お祖父さんのようすがいつになく極めて真剣なのに、すっかり気圧されてしまっていました。

けれどもケメトスには、お祖父さんの言ったことがよくわかりませんでした。ただ、自分の生まれた時に星が流れたということだけが、はっきり頭にはいりました。そしてそのことを考えると、何だか嬉しいような力強いような気がしました。

それから彼は、晩になるとよく星を眺めました。ことに、屋根の上にあがって、林檎やなんかをかじりながら、星を見るのが愉快でした。ぴかっと光って長い尾を引いて、空の奥へ消えてゆく流れ星を見つけると、

喜んで飛び上がりました。

「自分もあんなに空が飛べたら……」と彼は考えました。

しかし空を飛ぶのは容易なことではありませんでした。それでケメトスは、高い所へ飛び上がったり飛び下りたりして、せめてもの心やりをしたいと思いました。飛び上がる方はむずかしいけれど、飛び下りる方はさほどでもありませんでした。

ケメトスは一生懸命になって、高い所から飛び下りる練習をいたしました。野山を駆け廻ったり、木によじ登ったり、いたずらばかりしていたものですから、

大変身軽になっていました。一年もたつうちには、ちょっとした呼吸(こきゅう)でもって、屋根や木の枝やその他の高い所から、わけなく飛び下りられるようになりました。

「ケメトスは鳥の生れ変わりだ」などと言って、近所の人達は驚いていました。彼はますます得意になって、その技を練習いたしました。

二

ケメトスの評判は次第(しだい)に四方へ広がって、ついにそ

の土地の王様の耳にはいりました。王様は珍しいことに思われて、人を遣わしてケメトスを招かれました。

ケメトスがいよいよ都へ出発する時になって、お祖父さんは彼を側に呼んで言いました。

「とにかく一つの技能に秀でるということは、それが不正なものでない限り、至ってよいことだ。それでわしは今まで、お前が一生懸命になってるのを黙って見ていた。けれどよく考えると、わしはやはりお前の終わりが気にかかる。しかし今更もう仕方はない。ただ何事も控え目にやるがよい。自分の力以上のことをしてはいけない。くれぐれも高慢な心を起こさないよう

にね、ケメトスや」

　ケメトスはお祖父さんの首に抱きつきました。お祖父さんは黙って涙を流しました。ケメトスはその涙を拭(ふ)いてやって、それから、きっと名前を揚(あ)げると誓って、勇んで都へ上(のぼ)りました。

　国王はケメトスがまだ十五六歳の若者であるのを見て、案外(あんがい)な気がされました。しかしその技をためしてみられると、初めて舌を捲(ま)いて驚かれました。十尺(しゃく)二十尺ほどもいきなり飛び上がるばかりでなく、飛び下りる方になると、七八十尺の高い所からでも平気で飛んで、すっくとつっ立ってるのです。

それは色々の運動が大変盛んな時でした。でケメトスは、飛び方の長（おさ）として王様から抱（かか）えられ、宮殿のうちの立派な部屋に住むこととなりました。

ケメトスの評判が諸方（しょほう）に響き渡ると、彼と技をくらべようという者がたくさん出て来ました。しかし誰も彼に及ぶ者はありませんでした。飛び上がる方ももちろんかないませんでしたが、飛び下りる方になると、大抵（たいてい）の者は足を挫（くじ）いたり腰（こし）の骨を折ったりして、逃げ戻りました。

ケメトスはますますその技を磨（みが）くと共に、夜の空の流れ星を眺めては、お祖父さんの言葉を思い出して、

一生一代の晴業（はれわざ）をして名を上げたいと考えました。

ある時王様は諸国の王を招かれて、盛んな宴を催されました。そして御自慢のケメトスを召されて、技を見せてくれと頼まれました。諸国の王様達も、かねがねケメトスの評判を聞いていられますので、一緒に所望されました。

「いよいよ時期が来た」とケメトスは考えました。

宮殿の横に、高さ三百尺（しゃく）の塔が立っていました。大きな河の流れや森を見下ろして、空高くそびえた、実に見事な塔でした。ケメトスはその塔の頂（いただき）から、夜、炬火（たいまつ）を手に持って、飛び下りると言い出しました。

王様はじめ人々はびっくりしました。いくらケメトスが身軽（みがる）だからといって、三百尺の上から飛び下りられるわけはありません。そんなことをしたら体が粉みじんになると言って、人々は口をそろえて止めました。しかしケメトスは無理に言い張りました。彼の言うままに任せるの外はありませんでした。

三

その晩になると、大変な騒ぎとなりました。国王はじめ諸国の王様達は、塔の近くの河原（かわら）に席を設けられ、

その他の者はあたりを取り巻き、都の人々や近在の人達まで出て来て、塔が見える限りの土地は見物人で埋まりました。ケメトスが飛び下りる塔の下の場所には、もうせんが敷きつめられ、まわりにはかがりびが焚（た）かれました。

　ケメトスは塔の頂に上って、空の星に向かって長い間祈りを捧げました。お祖父（じい）さんから聞かされたことが、自分の運命が、今はっきりとわかる気がしました。やがて彼は右手に炬火を持って、塔の頂に現われました。それを見て四方から、雷（らい）のような喝采（かっさい）のどよめきが起こりました。塔の上から眺（なが）めると、一面に茫（ぼう）とし

た星明りでした。大河（たいが）の流れがえんえんと続いており、所々に森がこんもりと茂り、宮殿からずっと都の町が屋根並（やねなみ）を揃（そろ）え、その間々は、見渡す限り見物人で埋まっていました。

ケメトスは、空の星に向かって最後にも一度心で祈り、それから、右手の炬火（たいまつ）を三度輪に振って、飛び下りる合図をしました。どっと歓呼（かんこ）の声が響いて、あとはしいんと静まり返りました。ケメトスは右手に高く炬火かざしながら、大河の深い淵（ふち）へ向かって力いっぱい飛びました。［＃「飛びました。」は底本では「飛びました」］

人々は息を凝（こ）らして、塔から離れたケメトスを見つめました。ところがケメトスの体は、塔の下のもうせんの上へ落ちて来ないで、あたかも羽が生えて飛ぶように、すっと空を掠（かす）めて、炬火の光を長く尾（お）［＃ルビの「お」は底本では「を」］に引きながら、程離（ほどはな）れた大河の淵へ落ちこんで、そのまま見えなくなってしまいました。あまりに見事なのとあまりに意外なのとで、人々はしばらく茫然（ぼうぜん）としていました。

　やがてその驚きが静まると、新たな騒ぎが起こりました。王様の命令によって、人々は急いで舟を河に出して、ケメトスが陥（おちい）った淵を探し始めました。その

捜索（そうさく）は三四日間続きました。しかしケメトスはどこにも見出されませんでした。ケメトスは名前だけを残して、それきり消え失せてしまいました。

その報知（しらせ）を受けたお祖父（じい）さんは、一言も口をきかずに、ただ悲しげにうなずきました。

それから後、彗星（ほうきぼし）が空に出るのを見ると、土地の人達は、「ケメトスが飛んでる！」といつも言いました。実際、ケメトスが炬火をかざして塔から河の淵へ飛んだ有様（ありさま）は、空に出る彗星とそっくりだったそうです。

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社
１９９０（平成２）年11月27日第1刷発行
入力：kompass
校正：門田裕志、小林繁雄
２００６年４月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。